

令和 4 年 4 月 10 日現在

機関番号：11301  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2018～2021  
課題番号：18K00365  
研究課題名(和文)近代初期イギリスの商業劇場における楽屋正面壁の構造と使用方法に関する総合的研究  
  
研究課題名(英文)The Structure and Functions of the Tiring-house Facade in Early Modern English Professional Playhouses  
  
研究代表者  
市川 真理子 (Ichikawa, Mariko)  
  
東北大学・国際文化研究科・名誉教授  
  
研究者番号：80142785  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、楽屋正面壁の構造と使用方法に関する諸問題を総合的に考察しようとするものである。オリジナル・ステイジングの観点からすると、とりわけ重要な問題は、楽屋正面壁の開口部の数とカーテンの使用法である。すなわち、左右のドアだけであったのか、あるいはその中間にカーテンに覆われた「発見の間」(discovery space)が存在したのか、という問題である。1580年から1642年までの間に執筆された劇作品の中のト書きを総合的に調査した結果、中央開口部の存在およびカーテンのロケーションを示唆する新たな例を数件発見することができた。それらに関する論文を3点執筆した。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

国内国外ともに、近代初期イギリス劇の研究者の大方は文学批評や文化研究等に携わっている。そうした研究を直接的ないしは間接的に支える基礎学問の中に、オリジナル・ステイジング研究を含む演劇史の分野がある。本研究が扱う楽屋正面壁の構造の諸問題は、近代初期イギリス劇の各台詞やト書きの意味を解釈する際、ひいては、各シーンや劇全体の議論において、極めて重要な前提ないしは要素となる。したがって、それらの解明はオリジナル・ステイジングの研究のみならず、現行版本の編纂、文学批評や文化研究等にも貢献することができる。

研究成果の概要(英文)：When we consider how early modern English plays were staged in the London professional playhouses of the time, one crucial factor is the number of openings in the tiring-house wall. Early modern stage directions provide three stage directions that refer explicitly to three doors. Some stage historians, however, do not think these directions reliable. By examining stage directions in the extant plays written between 1580 and 1642, I have found other directions indicating more than two doorways. These examples could support the reliability of the three explicit stage directions. I have written three articles about these new findings.

研究分野：イギリス・ルネサンス演劇

キーワード：劇場 楽屋正面壁 ドア カーテン

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 近代初期イギリスの商業劇場においては、舞台背景の書割 (backdrop) は使用されなかったが、楽屋と舞台との間にある楽屋正面壁 (tiring-house façade) が極めて重要な役割を果たした。しかし、その構造や使用方法に関しては不明なところが多い。

(2) この時期を通して頻繁に見られる何種類かのシーン設定があるが、ここでは、通常、ドア、バルコニー、中央開口部等が重要なアクションのために特定の場所として使われる。それらのシーンは明確に楽屋正面壁の構造を前提として書かれているが、他のシーンも、漠然とではあっても、その構造を前提に作られているはずである。つまり、劇テキストは、楽屋正面壁に関する諸問題を解明するための証拠や手掛かりを何らかの形で含んでいるはずであり、綿密に調査すれば、まだ見つけられていない証拠を発見することができるのではないかと考えた。このように考え、本研究を開始した。

### 2. 研究の目的

(1) 近代初期イギリスの商業劇場における上演において、舞台背後の楽屋正面壁は、しばしばシーンの場所の設定 (頻繁に見られるものとして、家の前、城壁の前、洞窟の前などがある) を視覚的に支える舞台装置としての役割を果たした。その外観、すなわち、左右のドアと中央開口部を有し、上方にはバルコニーがあること、のためである、と一般的に考えられている。しかし、特に中央開口部は、古くからきわめて問題の多い箇所である。かつては内舞台 (inner stage) と呼ばれたこともあったが、その名が示唆するような構造はつとに否定され、現在では「発見の間」 (discovery space)、あるいはもっとニュートラルに中央開口部 (central opening) と呼ばれている。だが、その開口部の存在を認めようとする研究者もいる。この問題の解決は最重要課題となってきた。

(2) 上記の課題を含め、各部分の構造や設備、使用方法に関しては依然として不明確なところが多い。当時の様々な演劇関係文書や劇テキスト自体の調査ないしは分析により、新たな証拠や手掛かりを収集し、劇作家や俳優たちが執筆や演技の前提としていた楽屋正面壁の構造や設備、使用方法に関する習慣を再構築することを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 劇場や観劇への言及を含む可能性がある様々な種類の文書と劇作品自体とを調査対象として、問題解明のための証拠や手掛かりとなる情報や例の発見に努めた。特に、劇テキストの調査においては、窓、ドア、カーテン等に言及するト書きや台詞ないしは劇場で書き加えられた指示や注記だとか、これらの設備の使用を必要とするアクションなどを収集した。

(2) 収集したデータは、作品が上演された時期と劇場およびその種類に関して分類し、整理した。

(3) データの収集に当たっては、効率化を図るため、*Literature Online (LION)* 等のデータベースも活用したが、無論、収集した例の妥当性は、*Early English Books Online (EEBO)* 等のファクシミリで確認することを怠らなかった。研究計画の開始直後は、現存する上演用台本などのマニユスクリプトや、*EEBO* に含まれていない劇作品やその他の作品および文書など、直接、オリジナル・テキストを調査する必要のあるものは *British Library, Folger Shakespeare Library* 等で閲覧することができた。

(4) しかし、その後、パンデミック状況となり、上記の研究図書館において資料を調査することが困難となったため、関連分野の研究書や現行版本の調査等を重点的に行いながら、理論の構築に専念した。

### 4. 研究成果

(1) 本研究を開始したころ、楽屋正面壁の開口部の数に関して重要な議論を含む著書が出版された (Thomson)。その議論は、これまで大方の研究者たちのコンセンサスとなっていた左右のドアの間の開口部の存在を根本から見直そうとするものであった: “Was There a Central Opening in the Tiring House Wall?” (pp. 213–41)。Leslie Thomson の結論は中央開口部の存在を示す決定的証拠は存在しない、というものである。オリジナル・ステージングの観点からして、正面壁におけるドアの数は最も重要な要因であり、この問題に焦点を合わせるべきと判断した。同氏は近代初期演劇言語 (ト書き) 研究の権威であるが、3つのドアに言及するト書きは信頼に足るものではないと断定している。すなわち、次の3つのト書きである。

*Enter three in blacke clokes, at three doores.*

(Thomas Heywood, *The Four Prentices of London*, A4r)

*Enter Ioculo, Frisco, and Mopso, at three seuerall doores.*

(Anonymous, *The Maid's Metamorphosis*, D4v)

*Enter Maister Touch-stone, and Quick-siluer at Seuerall doores, Quick-siluer with his hat, pumps, short sword and dagger, and a Racket trussed vp vnder his cloake. At the middle dore, Enter Golding discovering a Gold-smiths shoppe, and walking short turns before it.*

(Ben Jonson, George Chapman, and John Marston, *Eastward Ho!*, A2r)

劇場によって舞台のドアの数は異なっていたかもしれないが、少なくともそれら3つのト書きが含まれている劇作品が上演された劇場には3つのドアがあったのではないか、という考えを根底から否定するものであった。まず、Thomson の議論の精査から始めた。

(2) Thomson の議論および、かねてより「2つのドア説」で知られる Tim Fitzpatrick の議論を分析した。両氏が上記のト書きを証拠として受け入れない理由の一つは、それらを含む作品の中に“at one door . . . at the other”というフレーズのト書きがあり、それと矛盾する3つのドアへの言及は間違いであるはずだ、というものであった( Thomson, pp. 231-32; Fitzpatrick, p. 258 )。しかし、両氏が主張するように“at one door . . . at the other”は必ずしもドアが2つしかないことを意味しているわけではなく、俳優が左右2つのドアを主たる出入口として使用した、という事実を反映しているのではないか、というのが私のかねてよりの見解であった。その仮説に関しては、拙論 Ichikawa 2019 の中で言及した。なお、この論文は、特殊な出入口としての中央開口部を覆うカーテンの使用方法について詳しく論じたものである。

(3) さらに、上述の仮説を証明するために、“at one door . . . at the other”というフレーズのト書きを含みながらも、もう一つのドアの使用を指示するト書きも含む作品を探した。これはフレーズの使い方の問題なので、1580年から1642年までの間に書かれた劇作品を、ロンドンの商業劇場で上演された作品に限定せず、すべてを対象として調査した結果、Burnell, *Landgartha* が上記の条件を満たしており、明らかに左右のドアを普通の出入口、中央開口部を特別な出入口として扱っていることを示唆するものであった (D1r; I4v)。こうした例などから3つのドアに言及するト書きの信頼性を論じたのが、拙論 Ichikawa 2020 である。

(4) しかし、1580年から1642年までの間に商業劇場で上演された作品の中にわずか3例しか3つのドアに言及するト書きがない、ということは事実であり、さらなる例を発見することができないものか、調査を続けたところ、3つと明示してはいないものの、2つ以上のドアの存在を示唆するフレーズを含むト書きを *Claudius Tiberius Nero* という悲劇の中に見つけることができた。すなわち、“*Enter Seianus: the guard besets all the doores, he draweth and proffereth to come diuers wayes: at last rusheth on the guard, fighteth, and is taken*” (L1v) である。この作品は従来、劇場での上演を目的としないで書かれたアカデミックな作品として扱われてきたが、近年、Martin Wiggins が商業劇場で上演された劇であるという説を提示している (p. 200)。上記のト書きに関して論じた拙論 Ichikawa 2022 は、現在印刷中である。

(5) こうして、楽屋正面壁の開口部の数に関する問題に焦点を合わせながらも、楽屋正面壁を覆うカーテンの問題なども扱い、正面壁の構造や使用方法に関する新たな見解を持つことができた。また、近代初期演劇言語の基本的なフレーズに関する新たな発見もあった。

#### < 引用文献 >

Anonymous. *Claudius Tiberius Nero, Rome's Greatest Tyrant*. London, 1607 (STC 24063).

Anonymous. *The Maid's Metamorphosis*. London, 1600 (STC 17188).

Burnell, Henry. *Landgartha*. Dublin, 1641 (Wing B5751).

Fitzpatrick, Tim. *Playwright, Space and Place in Early Modern Performance: Shakespeare and Company*. Farnham: Ashgate, 2011.

Heywood, Thomas. *The Four Prentices of London*. London, 1615 (STC 13321).

Ichikawa, Mariko. “‘All the Doores’: A Stage Direction Indicating More than Two Stage Doors”. *Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre* 76.1 (2022) [現在印刷中].

Ichikawa, Mariko. “‘At Three Doores’, ‘at Three Seuerall Doores’, and ‘at the Middle Dore’: Three Stage Directions Referring to Three Stage Doors”. *Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre* 74.2 (2020): 82–98.

Ichikawa, Mariko. “‘The Tire-house doore and Tapistrie between’: What Is the Location Implied in This Phrase?”. *Shakespeare Studies* 57 (2019): 1-18.

Jonson, Ben, George Chapman, and John Marston. *Eastward Ho!*. London, 1605 (STC 4970).  
Thomson, Leslie. *Discoveries on the Early Modern Stage: Contexts and Conventions*.  
Cambridge: Cambridge UP, 2018.  
Wiggins, Martin, with Catherine Richardson. *British Drama 1533–1642: A Catalogue*. Vol. 5.  
Oxford: Oxford UP, 2015.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Mariko Ichikawa	4. 巻 57
2. 論文標題 'The Tire-house doore and Tapistrie betweene': What Is the Location Implied in This Phrase?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Shakespeare Studies	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mariko Ichikawa	4. 巻 74
2. 論文標題 "At Three Doores", "At Three Seuerall Doores", and "At the Middle Dore": Three Stage Directions Referring to Three Stage Doors	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre	6. 最初と最後の頁 82-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mariko Ichikawa	4. 巻 76
2. 論文標題 "All the Doores": A Stage Direction Indicating More than Two Stage Doors	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------